

I 研究テーマ

感性豊かで主体的に学ぶかんらっ子の育成

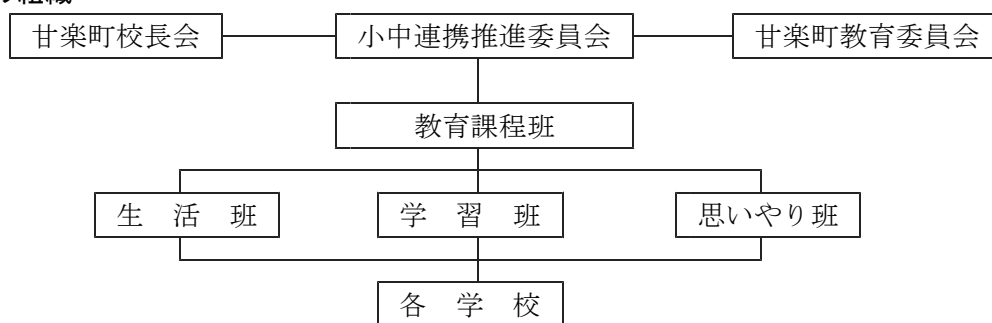
～9年間の学びのつながりを生かした指導を通して～

II 研究のねらい

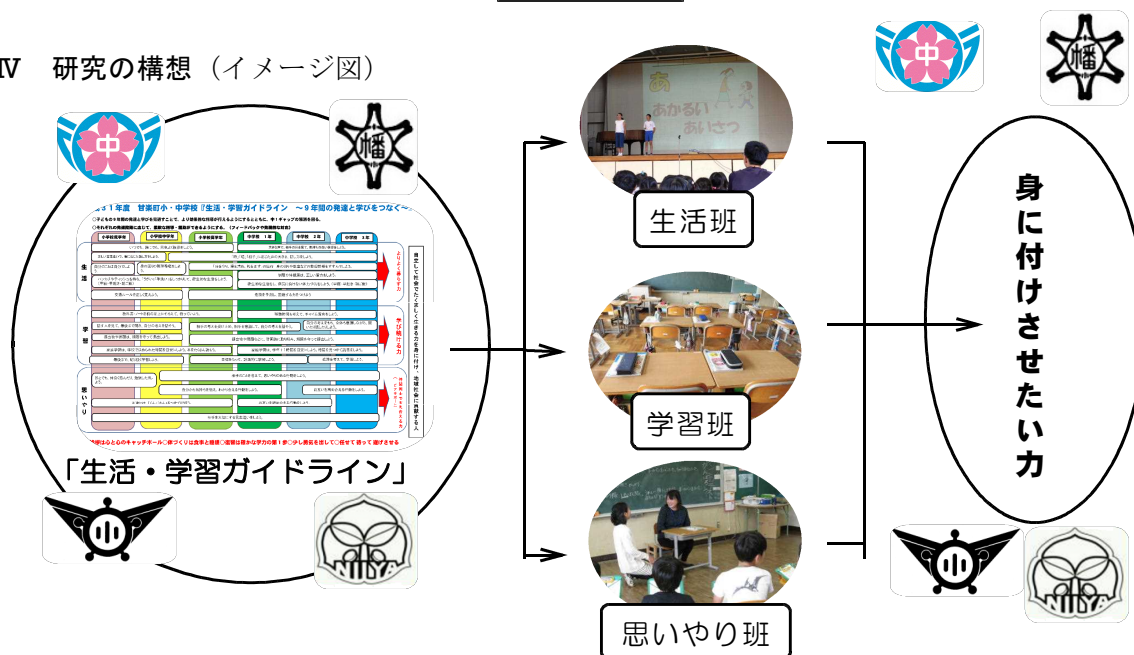
文部科学省は、小中連携教育を「小・中学校が互いに情報交換や交流を行うこと通じて、小学校教育から中学校教育への円滑な接続を目指す教育」としている。さらに新学習指導要領の実施に当たって、教育基本法、学校教育法に新たに規定された義務教育の目的・目標に掲げる資質、能力、態度等をよりよく養えるようにしていくことをねらいとして小中連携教育を推進している。

そこで本研究では、甘楽町内の小・中学校が目指す子供像を共有し、9年間を通じた学びを構築することにより、町全体で共通した視点での児童生徒の指導を実現することをねらいとしている。これによって子供たちは、9年間を通じて心情面、学習面ともに着実に成長を積み重ねていくことができると考える。この基盤のもとで豊かな感性が醸成され、中1ギャップの緩和による不登校の予防も期待でき、主体的に学習に向かう態度が養われ、学力の向上にもつながっていくものと考えている。

III 研究の組織



IV 研究の構想 (イメージ図)



V 研究の概要

昨年度は、本研究を始めるにあたって、まず、甘楽町4校の児童生徒の実態に則した「生活・学習ガイドライン」を作成することから始めた。このガイドラインでは、生活、学習、思いやりの3部会で、甘楽中学校3年生までに身に付けてほしい『力』（目指す子供像）を設定し、その子ども像を達成するための発達段階に応じた指導の手だてを盛り込んだ。それぞれの学校では、他校と情報を共有するなど連携を図ることで、9年間を見通した指導を同一歩調で行うことで、子供のより良い成長を目指している。

具体的には、生活班では、『よりよく暮らす力』を目指し、学校生活で大切にしてほしい「あ・た・り・ま・え」の習得を実践している。学習班では、学力向上を目指し、学習規律である「かんらのまなび」を実践し『学び続ける力』の定着を図っている。思いやり班では、「ピアサポート」を学校生活全般に取り入れることで『仲間同士で支え合える力』を身に付ける取組を行っている。

今年度は、3月から5月までコロナのために休校し、6月から学校が再開されたものの、コロナ禍での教育活動は制限が多く、かつ休校の分の学習内容の回復を図っていく中で、研究を進めていくのは困難な状況であった。そのため、昨年度の研究を受けて、それぞれの学校で、3つの班の研究を進め、班ごとに学校間の連絡を取り合いながら研究を進めていった。

VI 昨年度の実践例

【生活班】

大切にしてほしい「あたりまえ」の『「ま」：まもろう交通ルール』の取組の一つとして、児童が主体的に通学路の危険個所の調査を行った。調査の結果から、子どもたちは登下校時の歩き方や自転車の乗り方など安全な行動を話し合い、進んで交通事故の予防に努めようとする姿が見られるようになった。



通学路の危険個所の調査

【学習班】

昨年度までの実践で成果を上げた小幡小の「おばたのまなび」を基にした、「かんらのまなび」を全ての小学校で実践。学用品の整理整頓から始まり、より良い話し方・聞き方などが身に付いてくると、学習への意欲や集中力などの向上が見られるようになってきている。



学習規律を守り授業に集中

【思いやり班】

ピアサポートのできる児童生徒の育成を目指し、小小連携・小中連携として指導計画に基づいて、ソーシャルスキルトレーニングやグループワークトレーニングを実施している。ピアサポートの基本である話の聴き方「あいうえお」の共通理解ができてきている。



相手を思いやる言葉がけとは？

Ⅶ 今年度の実践例

1【生活班】（今年度の実践例）

（1）小幡小学校の実践内容

小中連携で実践している、「あたりまえ五ヶ条」の『「あ」：あかるいあいさつ』を重点的に取り組んでいく。それに伴い、2学期から児童会本部役員によるあいさつ運動を行った。コロナ禍ではあるができる範囲で実施をした。始業前に玄関に立ち、あいさつの旗を立て、検温が終わり校内に入る児童に元気よくあいさつをした。低学年は玄関が異なるので、教室の入り口で別の児童会本部役員が立ち、あいさつをした。



〈成果と課題〉

[成果]

- ・毎週水曜日には定期的にあいさつ運動を行おうと、児童会自ら発案し主体的に取り組む姿が見られた。
- ・お互いにあいさつをかわすことでコミュニケーションをはかることができていた。
- ・徐々にではあるが、あいさつへの意識が高まり、校内ですれ違ってもあいさつをする児童が増えた。

[課題]

- ・相手の顔を見て、元気よくあいさつできる児童が少ない。
 - ・あいさつをされたら返す児童は多いが、児童から先にあいさつをする子は少ない。
- ※引き続き指導していくと共に、職員が率先してあいさつを行っていく。

（2）福島小学校の実践内容

生活班では小学校6年間+中学3年間で「かんらのまなび」の「より良く暮らす力」に基づき、5つの柱において福島小学校でもそれらの力を育てることを目指した。具体的な取り組みとして、5つの「あたりまえ」をどの児童も覚え、それを実際の行動に移せるための取り組みを実践している。児童が自ら考え行動する場の設定としては、昨年度に引き続き『あたりまえの「ま」：守ろう交通安全』を中心に児童会が中心となった活動を行っている。

<具体的な取り組み>

- ①児童会本部児童による「あたりまえ」の内容の掲示。
- ②児童会本部の交通安全のビラ配り。地域の交通指導員さんと合同で、児童の登校に合わせて交通安全を心がけるビラ配り、下級生には「交通ルール」について説明を予定

した。(今年度はコロナ感染拡大防止のために中止とし、各クラスでのビラの配布のみ)

- ③校区内、通学路の危険個所の洗い出しと紹介。「何をすれば交通事故が防げるか」「登下校時の安全の確認」「自転車の安全な乗り方」などについて、児童会を中心に考え、方策を具体化する(今年は10月中旬に実施予定)

- ④『「ま」：守ろう交通安全』以外にも学習準備・挨拶等「あたりまえ」に関して、昨年度同様に学習規律や生活習慣の習得に関して取り組んでいる。



(3) 新屋小学校の実践内容

令和元年度、新屋小学校では、あたりまえ5か条の『「あ」：あかるいあいさつ』に重点を置いて、実践を重ねてきた。まずは、あたりまえ5か条を様々な機会を通して児童に定着をさせようと努めた。具体的には、各教室や廊下等にあたりまえ5か条を掲示するとともに、朝礼では学校長からの講話で内容を説明し、さらに児童会本部から全校児童へ呼びかける等を通して、啓発を図り、児童の意識を高めるようにした。

11月15日の思いやり集会では、「明るいあいさつとは、どういうあいさつ？」をテーマに開催した。また、それを受けて、全校でのあいさつ運動が始まった。これらの活動を通して、児童は、「仲良くなれて、学校が明るくなった。」「自分から自然とあいさつができるようになった。」「あいさつをしてくれてうれしかった、元気になった。」「これからも明るいあいさつをしていきたい。」といったような感想が寄せられた。あいさつを通して、児童の自己肯定感や安心感が高まることも分かってきた。また、学校評価アンケートのあいさつの項目でも、以前に比べ、教師で21ポイント、保護者で2ポイント、児童で5ポイント向上した。取組の主体が、個人や学級単位ではなく、学校全体で取り組んだことが良い成果をもたらしたと思われる。



思いやり集会でアビール



教室をまわってのあいさつ運動

令和2年度、コロナウイルス禍中ではあるが、昨年度に引き続き、可能な限りあいさつ運動を継続しており、明るいあいさつが着実に浸透してきている状況である。それに加えて今年度は、福島小学校の「まもろう交通ルール」の取り組みを参考に、本校でも交通ルールを守る活動にも力を入れている。具体的には、学期ごとに通学班会議を開催し、登下校で何に気を付け、またどんな歩き方をすればよいのか、さらに通学路の危険個所について、通学班ごとに話し合った。これらの活動を通して、児童の交通安全についての意識が高めることができた。

<成果と課題>

成果としては、小中4校が連携し、同一歩調で取り組むことにより、実践内容が明確になり、児童への指導が容易になったことが挙げられる。また、各校の取組を情報交換

することで、他校の実践例を参考に、本校の活動に生かすことができた。

課題としては、各校での取り組みについての情報共有が、未だ十分とはいえない状況なので、チームズ等のコミュニケーションツールを上手く活用して改善を図っていく必要がある。

(4) 甘楽中学校の実践内容

小学校で取り組んでいる「あ・た・り・ま・え」を本校の「時を守り、場を清め、礼を正す」に当てはめ、生徒会活動・部活動を中心に取り組んだ。

あ	礼を正す	・大きな声で、相手の目を見て、気持ちの良い挨拶をしよう ・「時」「場」「相手」に応じた声の大きさ、話し方をしよう
た	場を清め	・身の回りや教室などの整理整頓をすすんでしよう
り	時を守る	・危険を予測し、回避する力をつけよう（時間など余裕をもって行動できる）
ま	場を清め	・制服や体操着は、正しい着方をしよう
え	時を守る	・病気に負けない体力づくりをしよう（早寝、早起き、朝ご飯、規則正しい生活）

「あ」：明るい挨拶 「た」：正しい言葉遣い 「り」：利用しやすく 整理整頓
「ま」：守ろう 交通ルール 「え」：衛生的な生活

①生徒会活動・部活動との連携について

ア 「あ」：明るい挨拶 （礼を正す）

部活動終了後に、部活動ごとにローテーションを組み、挨拶運動を行った。挨拶する側とされる側を経験することにより、挨拶の大切さについて改めて学ぶことができた。

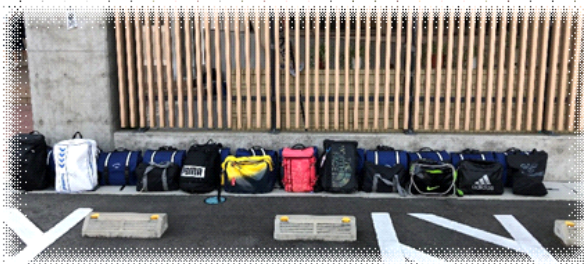
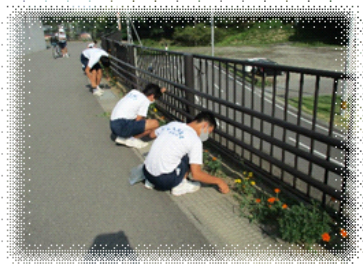


イ 「た」：正しい言葉遣い （礼を正す）

正しい言葉づかいについては、日常生活の中での指導を積み重ねてきた。職員室入室時のあいさつや授業準備、授業連絡等で敬意をもった話し方を身につけることができていた。

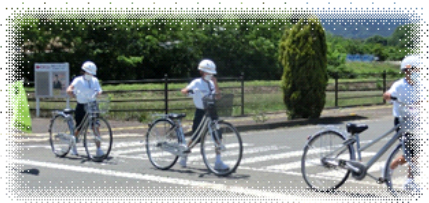
ウ 「り」：利用しやすく 整理整頓（場を清め）

環境委員会による環境美化活動や整美委員会による清掃活動を中心に学校や地域施設の整備を行ってきた。また、PTA 事業としても環境整備活動を行うことができた。さらに、生徒指導部会で荷物の置き方について話し合いが行われ、部活動単位で荷物の整理整頓ができるようになった。



エ 「ま」：守ろう交通ルール（時を守る）

学校が再開された6月には、交通安全教室を行い、自転車の乗り方について確認を行った。その後も、安全委員会を中心に、自転車の乗り方についての啓発や自転車のサドルチェックなどを行い、事故の未然防止に努めた。



オ 「え」：衛生的な生活（場を清め・時を守る）

制服や体操着の着用の仕方について、生徒会本部が確認を行い、全学年で共通理解を図ることができた。また、保健委員会を中心に感染症予防について啓発を行い、病気に負けない体力づくりを行った。



②成果と課題

〈成果〉

- ・多くの生徒が、挨拶をすることができ、小学校から継続して指導している「明るいあいさつ」について、定着してきた様子が見られた。
- ・学校生活における言葉遣いについて、気になる生徒はほとんど見られず、落ち着いた穏やかな学校生活を送ることができている。
- ・委員会や部活動などで、自分たちの環境について目を向けることができるようになり、周囲の状況に気を配ることができる生徒が増えてきた。
- ・小学校での危険箇所のチェックの取組により、安全に対する意識が高まってきた。自転車の乗り方についても、少しずつ改善されてきている。
- ・生徒会が中心となり、生徒が主体的になり啓発を進めることができた。



〈課題〉

- ・校内でよくできている挨拶を、地域に出たときにも実践できる実践力を身につけていく必要がある。
- ・整理整頓を意識できるようになっているが、全体への広がり在今后の課題である。今後は、一人一人が日々の生活の中で実践できるような支援を検討していきたい。
- ・安全に対する意識は高まってきているものの、自損事故でのけがが数件みられている。事故がゼロになるよう、継続的に自転車の乗り方の指導を行う必要がある。